

令和 7 年度第 1 回 立川市文化振興推進委員会 会議録

開催日時	令和 7 年 5 月 2 2 日（木曜日） 午後 3 時～5 時 30 分
開催場所	立川市役所 本庁舎 208・209 会議室
次第	1. 開会 2. 協議 立川市第 5 次文化振興計画原案について確認
配布資料	● 立川市第 5 次文化振興計画原案 ● 計画素案からの主な変更内容について ● 答申にあたって ● 委員名簿
出席者（敬称略）	[委員] 委員長 今井良朗、副委員長 瀧川淳、 宇治康、鈴木美智子、高木誠、成清北斗、松寄ゆかり、三浦康浩 [事務局] 文化スポーツ部長 奥野武司、地域文化課長 田中秀雄、市史編さん室長 白井貴幸、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 稲福秀哉、地域文化課芸術支援戦略係長 加島 信明、地域文化課文化振興係 坂内みちる
公開及び非公開	公開
傍聴者数	0 人
会議結果	・第 5 次文化振興計画（原案）について報告し、今後の計画の進め方について協議した。
担当	文化スポーツ部地域文化課 電話 042 - 506 - 0012

1. 開会

- 事務局より、配布資料の確認があった。
- 事務局より、人事異動による職員交代の報告があった。

2. 協議

- 事務局より立川市第5次文化振興計画（原案）に関する説明があった。
- ここで答申された計画をどのように推進していくことが望ましいのかということについて、協議を行った。

委員長：先程も説明がありましたけれど、内容については議会に報告され、最終的には市長決定されることになっています。今後は、ここで答申された内容、あるいは第5次の計画がどうかたちで進んでいくことが望ましいのかということについて、皆様からご意見をいただくような時間にしたいと思っております。今期で新たにメンバーになられた方も、どういう段階でこの委員会を進めたらいいか、あるいはどのようなことを議題としてあげたらいいか、どうやっていったらいいかを含めてご意見ございましたらお願いします。Aさんいかがでしょうか。

A委員：私もこの計画策定というのは初めて携わらせていただいて、勉強になりましたし、立てたからには引き続きどういったかたちでこの計画が進んでいくか見届けたいなと思っております。任期というのもございますので、いかに新しい委員の方に考え方をしっかり伝えて、取り組み状況がどうなっているとか、今後、文化振興推進委員会で管理するような体制を作っていくことが必要なのではないかと思えます。引き続き委員をやられる方もいらっしゃると思いますし、考え方を統一して、計画に対する思いをしっかり引き継いでやっていけたらいいなと思っております。

委員長：Bさんいかがでしょうか。

B委員：本当にその通りで、具体的に落とし込むところが大事だと思います。立川市第5次文化振興計画は文化芸術コーディネーターを位置付けることが明記されていることが大きなポイントだと思うので、今後どういう人がコーディネーターになって、どういう活動をしていくのか、というところが、少し早い段階で動いていけると、次の5年の計画の反省点や改善点を確認する材料にもなるので、早々に取りかかれればいいなと思いました。それと、こういう中長期計画を作るときに、例えばですが、奥多摩町は町民が取りたくなるようなデザインの冊子にしています。立川市の文化芸術についてどういう方向に向かっているか、読みたくなるようなデザインで作っていけると、より計画が伝わりやすくなるのではないかと思います。今後はそういう工夫も必要だなと思います。

委員長：これはかなり大切な意見だと思いますので、事務局からお答えいただいた方がいいかと思います。冊子状の計画というだけではなく、もう少しわかりやすいかたちで、誰もが手に取れるようなものを作ることもあり得るということですよね。この委員会の中でも、それぞれいいことをやっているのだけれども、知らない人が多い、というご意見がずっとあったんですよね。そういうことを考えていく上でも、今のBさんのご意見はぜひ検討していただけるといいのではないかなと思います。いかがでしょうか。

部長：Bさんとも意見交換させていただいた中では感じたのは、個々の活動とか、活動されているアーティストそれぞれには本当に光るものがあるし、それを伝えようとしている方もしっかりいらっしゃる。ホームページも立川ビルボードを中心にコンテンツがあるけれど、はたしてどれだけの市民の方がその存在を知っているのか。

ふれてみれば、すごく興味・関心がわくような書き方をされているし、写真の質感もページのデザインもしっかりしたものだという印象を受けたので、もったいなさを感じました。

先日の企画運営委員会で、いろいろな方がもっとこうしていったら文化芸術の振興にいいのではないかという議論されている場に参加しました。立川市が発行しているメディアとして最も市民に周知されるのは、相変わらず紙ベースの「広報たちかわ」です。今まで行政は、事実をいかにコンパクトに伝えるか、ということ意識して情報を発信してきましたが、今年の秋に広報たちかわはリニューアルします。まだアイディアベースですが、人にフォーカスをあてて、その方の活動を紹介するようなものがコラムとしてあるとか、より詳しく知りたい人はページにある QR コードからビルボードのサイトへ飛ぶことができる、というような位置づけでリニューアル以降、広報を活用していくことは十分考えられます。紙面は、より詳しく知りたい方の入り口です。

今年度より広報課が広報プロモーション課に変わり、広報プロモーション課長が、外から立川を見ても、立川にお住まいの方が立川を見ても立川市は本当にいい、誇りに思える街だと感じてもらえるような情報をどんどん出していききたいし、そういうことも意識しながらホームページも広報も作っていききたい、と話していました。不定期でもいいし、2か月に1回でもいいけれど、例えば文化芸術に携わる人にフォーカスしたコラムを掲載して、その方の活動を伝えていききたいのだがどうだろうと広報プロモーション課長に話したら、間髪入れずに「やりましょう」と言ってくれました。広報のリニューアルのタイミングに合わせて、知っていただくチャンネルを着実に増やしていききたいと思いますし、そのためには皆さんには知っていただくための魅力的なコンテンツを提供し続けていただくとか、その活動の充実を図るとか、それぞれの団体が自らこういう活動をしています、と発信力を高めていただくと、より効果を持ちます。今まで、魅力あるコンテンツはあるけれども知られていないということにもどかしさを感じていたのが、着実に前に進められる感触を現在は持っています。これが計画の推進にも繋がると考えております。

委員長：ここ2、3年でずいぶん変わってきましたが、今のお話しが進んでいくとさらに大きく変わると思います。紙の媒体にも QR コードがつけられますので、そこから今やっていることを知ることが出来ます。情報の入り口を作っていくことが必要とされていると思います。あと、お金はかかると思いますが、本当は駅の前で掲示板等によって大きく広報できると、バスを待っている間や待ち合わせをしている人の目に入って、多くの人が様々な情報を手に入れるきっかけにもなるので一番理想的です。

部長：この間の週末に立川駅周辺に行くと、あっちでも音楽が聞こえ、こっちではイベントをやり、ものすごい人でした。立川に行く好きなものと出会える、その好きなもの同士の交流で人の繋がりが生まれる、だからまた来たくなる、というまちづくりの方向性の中に、文化芸術活動やそれを好きな人とのコミュニティがしっかり組み込まれて、駅前で広報するデジタルサイネージにはもう少し力入れた方がいい、そこにはお金をかけるべきだという、方向になると効果的なんじゃないかという気がします。

委員長：デジタルサイネージはそんな大型でなくて、コンパクトなものを駅前に置くこともあります。行政でやるのが大変だとすれば、それこそスポンサーをつけてやることがあり得るかもしれないですね。どうもありがとうございました。それではCさんいかがでしょうか。

C委員：逆説的ないい方ですけども、文化とか芸術とは、頑張りすぎない方がいいのではないかと個人的に思っています。例えば、立川市の行政に計画があるのですが、計画ということに一番なじまないのが文化や芸術じゃないかという気がします。一方、何を大事にしなきゃいけないのかというと、継続です。立川には類まれな場所があるし、人材も揃っているため、その人達が続けられる環境をいかに守っていく、という視点がとても必要ではないかなと思います。コロナ禍の時にいろいろ議論がありましたけれど、民主主義としては、文化芸術とい

うのは本当に優先順位が下がってしまいます。しかし、文化芸術のような生きるための活力というのはとても大事ですから、抽象的な言い方になりますが、どうやって継続させていくか、そしてそれをどこで保持していくかということが大事だと思います。あと、まちづくり協議会であったり、地域文化振興財団であったり、いろいろな団体だったり会議体があるが、それがどういうふうに有効的に繋がっているのか、この委員会がどういう役割を持つのかというところがわかりにくくなっている気がします。整理をするのは難しいとは思いますが、発展的にうまく展開ができると、せっかくのいろいろな場なので有効に機能するのではないかなという気がします。

委員長：事務局側から見た時に、委員会の役割は何でしょうかね。

課長：今おっしゃっていただいたいろいろな団体さんが関わっていただく中で、その関係性が少し分かりにくくなっているということは今までも言われていたと思います。今年、職員の加島が新しく芸術支援戦略係という係に配属されまして、まさにこの係というのは、その団体を整理して新たなかたちで再構築するミッションを受けて設立されました。この先の5年間そういった取り組みもしっかりと進めて、わかりやすく、実効性のある体制や仕組みを構築していきたいと考えております。

委員長：さきほどの財団とまちづくり協議会との関係については、委員会でもたびたび話が出ています。今回も、もう少し緊密な連携があってもいいのではないかなということと、まちづくり協議会自体の財政をもっと真剣に考えるべきという意見が出ていました。今後はもう一度丁寧に、次の委員会に繋いでいただきたいと思います。まちづくり協議会の話は、この委員会でもずっと出ては頓挫していました。あえて私は今回の委員会の中では、財団と協議会をもっと繋ぐべきだという話しをしていましたが、これはぜひ検討事項として引き継いでいただければと思っています。

C 委員：あと1ついいですか？立川駅のコンコースのところに、ちょっとだけ昭和記念公園の花が飾られたり、11月になると箱根駅伝予選の時に大学ののぼり旗が立つのですよ。あれを見るとね、ああやってきたなって気がします。JR との関係があると思うが、のぼり旗レベルの広報活動がひょっとしたら面白いかなという気がします。

委員長：そうですね、のぼり旗は意外と穴ですよ。海外でものぼり旗は展覧会に合わせて必ず出ますし、のぼり旗を見ると足がそちらに向いていきますし、今やっていることのだいたいが伝わりますね。一考かもしれません。ではDさん。

D 委員：私は文化振興推進委員会に出たとき、ウェルビーイングのことを全然知らなくて、参加したことですごく勉強になりました。ワクワクすることが、大事だなんて思っていて、今回の立川市の第5次文化振興計画がこのまま実現していけば、世界から色々な人がやってきても大丈夫である、ワクワクさせるになると思っています。立川には社会資源がたくさんあるので、文化芸術コーディネーターによって立川がもっている社会資源が発信されれば、世界からくる様々な人へうまく発信することができるとしています。もう1つ、立川市には若いクリエイター達が住みたい街になってほしいなと思っています。立川市がワクワクする街に変わっていけば、街が若いクリエイターを刺激し、そういった刺激を与えるこの街に若いクリエイターが住みたいって思います。そんな若いクリエイターが住みたい、若いクリエイター住んでいる街、というものはものすごく未来があると思います。ですので、若い芸術家の人達の支援がしっかりできるようにしていっていただければと思っています。

委員長：若い芸術家への支援という議題も常に出てくるのですが、具体的にどういうかたちが望ましいのかって

ところに行かないですね。例えば、古くなった団地の一棟だけを空けて、そこを完全なアトリエのような形にするアイデアが実は出たりするのですよ。立川市にはアトリエとして空けられるような団地があるのではないかと、という話もありましたし。ですからできる範囲でやるということが必要なのだと思います。あとは立川市に限らず、日本中にアトリエとして空けたところを見学し、そのアトリエが出来たことによって、何がどう変わったかを調べる必要があると思います。ずっと出てくる議題の課題をどのくらい着実に埋めていくか、なんですよ。Eさんいかがでしょうか。

E 委員：こちらの会議参加させていただいて、今まで立川市民として知らないことだらけだったなと思いました。立川市のために、皆さんはさまざまな文化的な活動をされていると感じました。立川市に転入して 20 年くらい経ちますが、今回部長さんがおっしゃったように、広報も変わるようですし、ステップアップしていくことを一市民として楽しみにしています。会議に出させていただいて、知らないことをたくさん知ることが出来て、大変ありがたいと思っております。立川市は私が転入したときは駅周辺にも緑が多くて、それはそれで満足していたのですが、近年 IKEA ができたり、どんどんいろいろな商業施設ができました。外はできたのだから、あとは中身かなと参加させていただいて感じました。

委員長：Fさんいかがでしょう。繋がっていますか。
～通信不良のため省略～

委員長：それではそのうちまたお願いします、最初おっしゃっていたのは生きることの生活、という話しじゃないのかなと思いましたが、本当に難しいところなんですよ。食べることがやっとなのに、なんで文化芸術に気を配らなければならないのか、ということはよく出る話かと思います。原点に戻りますと、文化芸術、音楽などはもともと生活と結びついて生まれました。例えばお祭りは豊作を願われて行われました。しかし今、生活と文化は独立して存在しています。そのため、文化・芸術が生活と繋がらず、身近なものと感じられないことは仕方のないことかと思います。現代の中で文化・芸術が生活と直接結べるようななにかがないのかを考えていく必要があると思います。そのため、文化芸術を理解するために、以前から私はその街のいろいろなことを知るところから始めています。学生を連れて行く際は、まず図書館に連れていき、図書館でこの街や村にどういう遊びがあり、どういう生活を送っているか全て調べます。そこからあらためて考えてもらったりもします。文化芸術と生活を身近に感じてもらうことが難しいのは事実なんですよ。これも前回の委員会でもお話ししたと思うのですけれども、生活の中に文化も芸術も関係しないと困るということを語っていくことが大事なんですよ。言っていくしかないというのがポイントです。では副委員長。

副委員長：2年間いろいろな案を聞いて、有意義に勉強させていただいたなと思いました。第4次文化振興計画の振り返りから始まって、第5次の計画の立案というところで今がある訳ですけども、その中で、すでに立川市というのは、人も物もコトも実際に文化振興に関わっているんだということを再認識しました。その中で、委員の皆さんがおっしゃったように、活動の場がどこにあるのかが見えにくいということを、どうまとめていって見せていくのかという話しをずっとしてきたのかなと思います。そういう意味では今回の第5次の計画の中でB委員や委員長もおっしゃっていましたが、文化芸術コーディネーターという存在が、実は立川市ってこんなことをやっているんだということを、マインドマップのように繋いでみせるキーパーソンになるのではないかと考えていて、ぜひ次回の委員会ではこちらを実現するよう動いていただく、または提案していただくというのが大切なかなと思いました。今回策定した立川市第5次文化振興計画をぜひ手に取って読んでいただきたいという話

しがありましたが、私も深く同感します。例えば文部科学省にしてもいろいろな官公庁にしても、答申は本文と一緒に概要として1枚、必ず図を出します。なにかそういったものをカラーで作られて、それが市民の手に取れる、興味を持った人がQRコードに行くと原案が読めるようなリーフレットがあるといいのかなと思います。もう1つは、この会議の中でもありましたけど、立川のアートを通して世界に立川を知ってもらおうことが、これからとても必要なことではないかと思います。立川駅を降りると、他の23区内の街の駅を降りるとでは、まだまだ立川駅は外国人の方は少ない印象です。けれども、立川が本当に強いところは、今日立川駅から歩いてきたのですが、出た瞬間からアートへの入り口なんですよ。いろいろなところにアートがあって、昭和記念公園入って行くと自然の中にもアートがあって、高校生がここで台本を読んだり、スポーツをしていて、文化・スポーツが自然なかたちで街の中に入り込んでいるところがすごく目に入りました。そこをいかに世界へ見せていくかが、これからの重要な課題なのかなと思っています。

委員長：そうですね、今いろいろご協力いただいているのは次の委員会にどう繋げていくかということですから、次の委員会の中に引き継がれていければいいと思います。その中でも第5次文化振興計画は第4次までとは全く違った部分があります。ウェルビーイングを実感できるようにしていこうじゃないかということと、コーディネーターを設けましょうということですが、これは大きい違いだと思います。コーディネーターの必要性を考えるきっかけを作ってくださったのはC委員でした。コーディネーターを設けることで芸術監督的な話題になっていいんじゃないか、そういうものが出来ていいんじゃないのか、ということが第5次文化振興計画に盛り込まれたことが1つの成果だと思います。ぜひこれは実現に向けて、部長、課長お願いいたします。

部長：立川にある資源や情報、人も有機的に連携することができ、いろいろなかけ算がされることで、もっと興味関心だとか、そこに寄せる思いももっと膨らんでいく可能性があります。ここで30年を迎えたファール立川アートというのは、これまでは地域の皆さんにあれがいかにか素晴らしいものかを知っていただく活動をされていて、もう活動として定着しています。ただあのアートの半数以上は街のビルの所有物でして、今後どう維持・更新するかが、かなり切実な問題になりつつあります。行政がいかにかファール立川アートのよさを発信しても限界がありますが、アートに精通している影響力がある人が。外から詳しく語ることで、興味をもち、足を運んでくださると思います。北川フラムさんの繋がりで、瀬戸内国際芸術祭があり、姉妹都市の大町も北アルプス国際芸術祭をやっていて、そういったところに来た外国人が本国に帰る前に、フラムが手掛けたファール立川アートを見に行かないともったいないくらいの認知度になると、おのずと立川に寄っていただけると思います。情報の伝達の仕方、という部分にアプローチするためにも、計画の中でご提案されているコーディネーターは、今ある資源を繋ぐハブ役にもなるし、それを外に対してアピールするいい推進役にもなります。コーディネーターの必要性が十分浸透していない中、行政がコーディネーターへ財源を投じると、何をやっているのかという問われ方をするので、立川の文化が誇らしいものである、ということを対外に知ってもらって、立川が素晴らしい街だと思ってもらえるためには、コーディネーターのポジションが必要だという声がおのずと出てくれるような発信だとか、そういうことをやっていくのもわれわれ行政の仕事なのかなと感じています。

委員長：いろいろな発信方法を考えていけば、まだあるのかもしれないですね。インバウンドを意識すれば、ウェブサイトの中にファールがちゃんと紹介できるようなかたちを作っていくのがいいでしょう。あと、ファールの彫刻って相当著名な作家が多いので、そこをアピールしないともったいないなと思います。僕は作家のスタシスさんと繋がりがありますが、スタシスさんは立川のこれは俺が作ったからね、とものすごく大事にされていて、ちゃんと展示のときに出てくるようにしています。皆さんここに出品していることを誇りに思っていて、意外と価値を知らないのは立川側かもしれないということもあり得ます。国内の作家でも相当の人達がみんな出してい

ますから、本当これはもったいないです。ファーレ立川アートの活かし方も、次の委員会でまた継続して協議していけたらと思います。いったんどう引き継いでいくかというところはここまでにして、フリーなかたちで少し意見交換ができればと思います。

課長：本日は精力的にご協議いただきましてありがとうございました。すでにお知らせしているところですが、委員の任期は2年ですので、今回、現職の最後の会議となります。次期委員の市民公募委員の募集につきましてはすでに終了しております。今後は事務局の方で選定を行います。また関係団体の皆様には推薦依頼の準備を行っております。今日でこの場を離れられる方もいらっしゃると思いますが、また引き続き立川市の文化芸術振興にお力添えをいただければと思います。ぜひ次期委員の方々のもとで行う計画の進捗確認についても見届けていただければと思います。事務局からは以上です。

委員長：どうもありがとうございました。